

## 「対話型平和ミュージアム」をつくる

君島 東彦

### 1. リニューアルされた平和ミュージアムをどう活かすか

わたしはこの4月から吾郷眞一先生の後を継いで、国際平和ミュージアムの館長をつとめております。まだ館長になったばかりです。リニューアルについては、わたしの前任の吾郷館長、それから市井副館長、それに細谷副館長の皆様が奮闘、まさに奮闘されて、いまリニューアルが完成に近づきつつあるところです。わたし自身はリニューアルに少しは関わりましたが、やはり吾郷館長、市井副館長、細谷副館長のご努力のたまものです。いま細谷先生のお話を伺いましたが、なかなか感動的なお話だったと思います。わたしの仕事は、これから、このリニューアルされた国際平和ミュージアムをどのよう

に活かしていくのか、どのようにわたしたちは使っていくのか、ということになります。

わたしとしてはこういうパワーポイントを用意しましたが、立命館大学国際平和ミュージアムの来歴のところは安齋先生のお話でカバーされますので、繰り返さなくていいと思います。それから、国際平和ミュージアムの課題、これはちょっと触れます。それから、「対話」ということをわたし自身の課題と思っていますので、その「対話」というところを少しお話しさせていただきたいと思います。

## 2. 立命館大学として平和責任を果たす

まず立命館大学国際平和ミュージアムの来歴です。ここは安齋先生のお話でだいたいカバーされていると思います。立命館大学は2025年に創立125周年を迎えます。わたしたちはこの125周年というのを一つの大きな区切りと考えていますが、この125年を振り返ったときに、戦時体制下の立命館大学に対する痛切な悔恨の念、反省の念があります。これが戦後の立命館の「平和と民主主義」という教学理念になるわけです。それは立命館憲章にも反映されています。わたし自身は、それは立命館大学が平和責任を果たすことだと考えています。平和責任という言葉は聞きなれないかもしれませんが。これは長崎大学教授だった哲学者・高橋眞司先生が2000年に提唱された概念で、「世界のすべての人間が持っている責任、平和のために働く責任、戦争責任に先立つ、より根源的な責任」として説明されています。

「平和と民主主義」という教学理念を象徴するものとして、わたしたちは戦没学生記念像くわだつみのこえ>を持っていますし、2005年に開設された戦没画学生慰霊美術館無言館の「京都館一いのちの画室（アトリエ）」を持っているわけですね。ここがやはり、わたしたちの原点ではないかと思っています。

## 3. 平和創造の拠点

国際平和ミュージアムの課題、これはリニューアルにおいていろいろなかたちで表現されてきたこと

です。それをわたしなりにパラフレーズして、わたし個人としてはどういうふうに考えているか、お話ししたいと思います。

1つ目は、平和創造の拠点となるということです。平和ミュージアムは、過去の戦争とか過去の暴力、あるいは現在の戦争とか現在の暴力について触れます。それらを展示しますけれども、目的は平和をつくることですね。平和ミュージアムは、これから平和をつくっていく、どのようにつくっていくかということを考えてもらう場としてあると思います。ですから、平和創造の拠点としてあるということだと思います。いま戦争が進行中です。いま世界はある意味では戦時下にあるわけです。ヨーロッパではウクライナで戦争が起きている。それから、東アジアではまだ具体的な戦争にはなっていませんが、ある意味で戦争準備が進行している。緊張が高まっている状態です。このような世界の中で、わたしたちはどのようなことを発信できるのか、どのようなことを考えてもらうのか。非常に喫緊の課題だと思います。

わたしたちのミュージアムの展示は、過去の戦争と平和の関係、歴史、実相に触れるわけですが、それを見ることがいま起こっている戦争を止める力、あるいはこれから起こる可能性、危険のある戦争を止める力にならなければいけないわけです。わたしはそうなり得ると思いますが、平和ミュージアムの展示がいまの戦争を理解し、これからの戦争を防ぐ力になれるかどうか問われているとわたしは思っています。

2つ目としては、大学の平和ミュージアムですから、大学教育あるいは研究をバックグラウンドにしていて、大学教育の中で活用する、あるいは附属校の一貫教育において活用することが当然できるし、期待されると思っています。

## 4. ピース・ツーリズム

3つ目としては、ミュージアムとして自覚・自立するということです。博物館学の基礎の上に立って、他のミュージアムからも学ぶことができる。学芸員

の役割は決定的に重要だと思います。それから、京都にあるものとして京都の文化創造に貢献できる。それから、ピース・ツーリズムの場として多くの人々に見ていただきたいと思います。いま広島市をはじめとしてピース・ツーリズムという表現が使われています。他方で、ダーク・ツーリズムという言葉もあって、例えばアウシュビッツなどはダーク・ツーリズムの場と言われることがあります。過去の戦争の戦跡とか、過去の災害の被災地を訪ねて、そこで学ぶという意味で、ダーク・ツーリズムと言われます。ピース・ツーリズムとダーク・ツーリズムは重なり合う面があると思います。立命の平和ミュージアムもピース・ツーリズムの場として考えることができます。わたしたちは、修学旅行等で、多くの若い人々を迎えます。この貴重な機会をどう生かすか、我々の課題ですね。

## 5. 慰霊・追悼の場としての平和ミュージアム

「ミュージアムはテンプル（神殿）かフォーラムか」というところは、時間の関係で簡単に触れるにとどめます。広島・長崎・沖縄のミュージアムは明らかに慰霊・追悼の性格も持っているわけですが、立命のミュージアムにはそういう自覚はないかもしれません。わたし個人としては、立命のミュージアムも慰霊・追悼の性格も持っているのではないかと考えています。無言館などは戦没画学生慰霊美術館と名のついているとおり、明らかにある種の慰霊の側面もあるのだらうと思います。

## 6. 対話の場としての平和ミュージアム

わたしが平和ミュージアムの館長をお引き受けしたとき、どういうミュージアムをつくるのかということを考えてみました。そのとき、わたしは「対話」がキーワードではないかと思いました。我々はミュージアムで対話をするということだと思います。

3つの「対話」があると思います。1つは、死者・戦没者との対話です。わたつみ像とか無言館の絵との対話は、美術作品との対話ですが、同時に

戦没者との対話でもあるという気がします。わたしたちには、戦没学生の声、戦没画学生の声が聞こえます。

それから、2つ目の対話として、もちろん展示との対話です。展示はいろいろな問いかけをしてくれます。学習指導要領が「主体的・対話的で深い学び」ということを言っていますが、美術館、博物館、我々のミュージアムにおいても、「対話」ということが出てくると思います。展示というのは、ある意味で「触媒」ですから、それを見た人に考えてもらうということになる。美術館の世界で、「対話型鑑賞」という手法が非常に発展していますけれども、これは参考になると考えています。

それから、3つ目の対話として、来館者同士の対話というものがあるわけです。展示は見学者に対していろいろな問いかけをしているわけですが、ミュージアムは見学者同士が対話する場、スペースも用意しています。これまでボランティアガイドの人たちとともにミュージアムをつくってきましたが、ボランティアガイドの人たちの役割はこれからますます大きくなるとわたしは思っています。それはファシリテーターとしての役割です。来館者の人たちが展示と対話できるように助けるファシリテーター、来館者同士の対話を助けるファシリテーター、これらの役割をガイドのみなさんに期待したいと思います。

## 7. 対話型の学びの深まり

このあたりは時間があまりありませんから、飛ばしますけれども、美術館の世界では「対話型鑑賞」という手法が非常に発達しています。この写真を見ていただければわかりますけれども、ファシリテーターの人が見学者に問いを発していく、問いを発することによって、見学者は深く鑑賞していく、絵を深く見ていくというやり方ですね。

東京都美術館と東京藝術大学の「とびらプロジェクト」というのがあります。ここではファシリテーターのことを「とびラー」と呼んでいますが、これは非常に成功しているプロジェクトです。東京都美

美術館は、こういうファシリテーターの人たちと一緒に美術館をつくっていくことをやっている。京都で言えば、京都芸術大学にアートコミュニケーション研究センターというところがあって、ここも「対話型鑑賞」の拠点です。「対話型鑑賞」というのはニューヨーク近代美術館（MoMA）で始まった手法のようですが、そこで働いていた福のり子さんが京都芸術大学でこのやり方を授業の中に取り入れて、発展させています。

さらに言うと、この「対話型鑑賞」はもともと美術教育ですけども、小中学校の全教科に「対話型鑑賞」の手法、「対話型授業」を取り入れていくというプロジェクトが愛媛県にあります。その愛媛県における「対話型授業」のプロジェクトの成果が、鈴木有紀『教えない授業——美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方』（英治出版、2019年）にまとめられています。

平和学習の世界でも、長崎市、長崎県が「対話型平和学習」ということをいろいろ試みられていて、これは注目されると思います。この写真は、丸木位里・丸木俊さんの「原爆の図」ですね。子どもたちがこの「原爆の図」を鑑賞しているわけですけども、ここから平和教育に発展していくということです。

沖縄では、仲本和さんという方、まだ若い人ですが、彼が「受動的でなく、能動的な対話を重視した「平和を押しつけない」新たな平和構築をここで議論していく」という、「対話型平和学習」を沖縄で試みられています。もちろん簡単ではないです。これはそれなりの準備が要る、注意が要る方法だと思えますが、こういう取り組みがなされています。

わたし自身もわたしの授業の中で「対話型」というのをやっていますし、それからわたしのゼミ生を上海に連れて行って、復旦大学と韓国のキョンヒ大学と立命館の学生が、「日中韓学生平和対話」というのをやってきました。

このようにいま、さまざまな領域において、対話型の学びの深まりがあります。

## 8. 「対話型平和ミュージアム」をどのようにつくるか

立命の平和ミュージアムは長い間、「みて、感じて、考えて」ということを言ってきましたが、わたしは4つ目を足したいわけです。「みて、感じて、考えて、対話する」平和ミュージアムです。ミュージアムのリニューアルのときに、ビジョンとかミッションをつくりましたが、その中に「対話を通じて、正解のない問いと向き合う」という要素が入っています。まさにこれですね。これをどう受け止めるかということになる。美術館の「対話型鑑賞」の方法は参考になりますが、平和博物館の場合、単純ではないわけで、平和ミュージアムの展示を理解するのに一定の知識は必要です。ですから、その一定の知識をガイドの人たちがやはり伝えていくということは必要でしょう。それから、正解がないかということ、全くないというわけでもなくて、平和博物館は、戦争・軍事力の克服という方向性は明らかに持っていますから、全く正解がないというわけでもない。むしろ問いかけによって、より妥当な方向、より平和的な方向を考えるように、対話をできないだろうかと思えます。この場合の対話は、「ソクラテス・メソッド」（米国のロースクールで用いられている教育法。教師が学生と問答することによって正解に導いていく方法）に近いかもしれません。この場合は問いかける人はファシリテーターというよりも教師に近づきますから、かなりの力量が要求されますね。いずれにしても、対話型の学びの深まりをうけて、平和ミュージアムとしても対話型のスタイルをつくっていきたいと思えます。

## 9. 東アジア諸国との修復外交の場としての平和ミュージアム

細谷先生のお話を聞いて改めて痛感しますが、我々の平和ミュージアムは、東アジアの過去の日本帝国の植民地支配や侵略戦争に本当に誠実に向き合っていると思えます。これはきわめて重要な「資産」——日本の国際関係の資産、外交的資産——で

あり、日本外交はこの認識の基礎の上に立つべきだろうと思います。ますます緊張を高めている東アジアにおいて、立命館大学国際平和ミュージアムは平和創造の拠点となり得るし、これから東アジアでこういう過去の正確な、誠実な歴史認識を基礎にした関係をつくっていくうえで、わたしたちの役割、責任は大きいのではないかと考えている次第です。これからの国際平和ミュージアムの挑戦に、どうぞご支援をお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

## 質疑応答

**市井：**君島先生、ありがとうございました。

それでは、今、11時15分過ぎになりましたが、全体としては11時半あたりで終わっていこうと思います。〔中略〕さて、3件目の質問ですが、これはまず質問を読み上げます。

本日は有意義なご講演をありがとうございました。昨今のウクライナ情勢や東アジアの動きを受けて、防衛力の増強を求める声が国内で高まっています。私自身は、憲法の平和主義の理念に共感しつつも、現実論としてそうした防衛力を高める声にも理解ができるような気がします。こうした状況を踏まえて、国際平和ミュージアムはどのようなメッセージを発信されようとされていますでしょうか、

というご質問が届いております。

この点につきましては、まず私のほうからご指名させていただくことになるとは思いますが、もう既にカメラが開かれているということなので、君島館長から「待ってました！」という感じだと思いますので、ご回答をよろしく願いいたします。

**君島：**市井先生、ありがとうございます。それから、ご質問ありがとうございます。

当然に予想されるご質問ですよ、これは。こういうご質問に対して私たちはどう考えるのかというのが問われると思います。これは別に国際平和

ミュージアムの公式見解ではありません。憲法学、平和学を専門とする一研究者としての私の考えを、時間の制約がありますから、短くお話しいたします。平和論は軍事論ではなく、関係論だということです。平和というのは、人々の、あるいは国家間の関係の問題です。

カントが「永遠平和のために」の最初のほうで言っていることですが、「平和とは国家間の一切の敵対関係が終わることである」と言っています。ですから、今の東アジアにおいて、国家間の敵対関係がどうなっているのかということです。もし敵対関係が終わらないのであれば、それは敵対関係から生まれる相手に対する恐怖とか、不安とか、敵意とか、憎悪、それから復讐心といった、そういう関係に基づく考え方が軍備の形を取ります。だから、軍備というのは軍備としてあるのではなくて、国家間にある様々な不安とか、恐怖とか、敵意とか、復讐心が軍備の形を取ります。ですから、最終的にはその関係—不安とか、恐怖とか、敵意といったものをどうやって私たちは克服していくのかということまで下りていかなければいなくて、それがまさに平和学なんです、ということを考えてほしいということなんです。軍備というのは表面的な話です。その基礎にある国家間の敵対関係、不安とか恐怖というものをどうやって私たちは克服していくのかということなんです。最終的には軍備ではないと私は思っていて、ミュージアムの展示を見ていただければ、今の東アジアがどういうふうにしてできたのか、どこに敵意の根があるのか。じゃ、私たちはどうしたら、その敵対関係を克服できるのかということだと思えます。私は、ミュージアムは一定の東アジアにおける敵対関係を克服する方向性を示唆しているというふうに思うんですね。差し当たり、現時点で、私のほうからは以上で、細谷先生が何か待ち構えていらっしゃいます。

**市井：**そうですね。じゃ、細谷先生、追加でよろしいですか。

**細谷：**軍事論ではなくて、平和論・関係論なんだという君島先生のお話に納得がいったんですが、ちょっと歴史学の立場からも一言言わせていただき

ます。これは多分、歴史研究の立場からすると、歴史や暴力の問題をどの視点から考えるのかという、視点とか歴史認識の問題でもあると思っています。

先ほど私は、中学での歴史教育の実践例を紹介したんですが、クラスで日露戦争をめぐるグループ討論をやっていたと。そのグループ討論では先生が、「この戦争をやってよかったのか、やるべきではなかったか」といった問いを提起して、日露戦争の背景などを学ばせる。学んだ上で調べて、子供たちが討論するという、そういうスタイルだったんですが、その討論では子供たちの中に、この戦争は「やるべきだ」、「やってよかった」、「当時の時代状況では仕方なかったんだ」、という意見を持つ子供たちがいたことが実践例の中で報告されていました。まさに戦争を肯定する意見なんですけど、これは別の言い方をすると、国家の視点に立って歴史を理解する見方、国家（権力側）の論理に依拠する歴史認識ではないでしょうか。それを一人ひとりがどう乗り越えられるのかということが求められていると私は思います。

つまり、国家の視点ではなくて、民衆とか弱者の視点に立って考えるような歴史の見方、あるいは自分のこととして、あるいは身近な家族の問題として考えるような歴史の見方、歴史認識が求められるんじゃないか。そうした視点に立てば、戦争というのは駄目だろう、絶対に駄目だということになるんじゃないか。これは歴史教育の問題、課題でもあるし、これからのミュージアムの実践の問題、あるいは戦争体験の継承の問題として受け止めていく必要があるんじゃないかと思います。この点は先ほど君島先生から、「対話型平和学習」というお話がありましたけど、この事例は非常に有益な実践例ですし、それと平和ミュージアムの展示を結びつけて学びを深めてということがやっぱり必要なんじゃないかというふうに私は思いました。以上です。